

もる目に
やるせなき秋の夕べをたびの空日記かきおればも
千鳥なく
いとつかれ一と夜を旅の山宿り檜火してきくやま
ものがたり
いざさらば曇らばくもれ函根山はるゝも見ゆる都
ならぬを。(M兄の一首も加へます。)

(一九二一、一〇)

秋の歌

四乙 上野文雄

月のさす野末はるかに閑ゆなり
秋をしらぶるすす蟲のこゑ
初秋の黄色き光のどかにて
小豆畑に蟋蟀啼く
秋の日はほのかに暮れて月出でぬ
文讀む窓にこほろぎの啼く
紅の日はまころび居ぬ秋の野に
夕暮人は動かざりけり
日光靜かに照りぬ見るかざり

こがね色なる稻の穂の上に
ふと浮ぶ歌を惜みて松葉もて
枯葉に刻む秋は寂しも
秋の夕きり立つ山を眺むれば
唯見ゆるのは枯葉なりけり
ゆらゆらとゆられて落つる桐の葉の
靜かに聞ゆたそがれの秋
○ 一甲 木村謙次
新しきインクの香ころよき
此の静けさや試験の教室
兄上を買つて貰ひしハモニカを
初めて吹きて一人ほほるむ
淋びしさに幼き時の日誌など
ひとときて見る冬近きかも
美しき新教科書の香を愛でぬ
櫻さかりの四月のあした
心地よく舞ひ上がりたる熱球を
見上げるをりに秋風の吹く。
毒々しき入道雲よ巨彈もて
打崩さんと思ひけり

はなかんですてにし紙を餌と思ひ

かけよる雞のいそほしきかも

一甲 大西渡

かりがねの空飛ふ夜さは月白く
道行く人の影あざやかし
秋草のさきはころべる廣野原
はをつむ乙女の花束美し
わん／＼とほわる犬の聲エス／＼と
よふ弟はいそいで外に

○ 一乙 岡崎諒

木々の葉は秋浅ければ色かわず
露のみしげし朝な／＼に
文机にひとり向ひて文を讀む
小窓のあたり鳩の來て鳴く
こがらしの吹きすさふ夜に空高く
月は冴ねたりものすごきまで
會へば去り去ればまた會ふ世の習
また會ふ夏のまぢ遠きかな
あすの日もあれど見られず見せられず
來む世のこともかくやあるらし

一丙 横山進一

青空に輕く流るゝ白雲の
秋の湖面に影を浮ぶも
里の子の遊ぶ社に赤々と
光を投げて秋日落ちゆく
秋の夜に野で鳴く蟲にさし出す
提灯の火の見ゆつかくれつ

○ 一丙 寺脇太次郎

秋片やすみわたりたる大空に
一つ光れるそのさびしさは
秋草の色美しく咲きみだる
庭面の隅に蟲の聲する
雨の夜や沈まりかへる世の中に
枯葉に風のあたる音聞ゆ
秋草のいづこもなく鳴く蟲の
聲もれ來るそのさびしさは
秋の野やいろさま／＼に立てかざる
ききやうかるかやおみなへしなど
○ 一丙 河村勇哲
ばんやりと心なしげにうく舟も

かぢありてこそ人のるらん
ふわ／＼としづみうきにしへうたんは
世をばうきよと知らするらん
叢にやどれる蟲のなく聲は
人の心をたてにささしむ

○ 一 丙 松宮誠

旅にして家路の山の夕影を

忍びてあれば雁みだれ啼く

春ふけて小鳥も鳴かず城跡の

青葉若葉の色さねて見ゆ

鯉釣る舟の蒔帆ばた／＼と

鳴りて寂しき海の夕暮

俳句

十句

特別會員 白鳴子 佐竹貞一

川澄んで魚の横きる小春哉

雪の夜や鼠の齒がむ音滅す

ひゞの目の赤み見て立つランプの燈

罐詰の枯野に光る口暗し
やうやくに藪おきかへる冬の風
蜜柑箱開けたる縄折れ目正しく
遅くかへればたゞ火箸よく光れり
手水したる音雪追々といふ夜にて
洋館のまはり寒さ箱になり居る
嘶き小霜晴明けゆく

雑吟

二 乙 H 生

柿の實や一つ残らぬ木暴風の後

柿の葉の地を蔽ひけり朝かな

いさゝ川魚の影なし秋の暮

秋雨にいつの間にやら濡れにけり

舊友乃安否を思ふ秋の夕

校堤のくるみ手を黄に染めにけり

啞々の聲満山響く秋の暮

風や破れ障子に吹荒るる

伊吹登山に際して

伊吹山銀河を仰ぎて路寒し

見下せばこれはとばかり見上げて

時雨

一 甲 石島達

時雨して得々と着るマント哉

城山や時雨の爲に遠く見ゆ

時雨して光るかはらの草動く

時雨して窓に木の葉の當る音

時雨きて暗くなりゆく座敷哉

時雨して銀杏のもとに集ひけり

時雨して子供等マントかぶり行く

黒板の隅おぼろなり時雨哉

一 乙 廣田良太郎

傘ほすにこまれる母の時雨時

秋草をそばにしながら池につる

木枯に又小言曰ふ雛坊主

寒い日のこたつの番は猫と祖父

竹生嶋にて

一 丙 楠好雄

浮島や沈みて見ゆる霧の朝

崖急に碧水さむし螢草

撫子や海にそは立つ巖の上
涼風に鳥隠れ行く白帆かな

新體詩

順禮 (童謠)

五 甲 野村秀峰

「一ツ積んでは父の爲二ツ積んでは母の爲」

細き銀の糸でも振る様な

優しい聲がもれて来る

雪の如きかよはき手もて

さびし鉦を打ちつゝ

悲しい歌をすさびつゝ

緑滴る真夏の松並木も

過ぎゆく二人の乙女子よ

尋ね／＼て早や幾歳!

父母を尋ぬる順禮や哀れ

季の月

春の夜は月も朧るに 暗香に漂へる其のあたり

隙間もる灯の光に 琴の音は誰がすさびぞ。

夏の夜は飛べる螢に 誘はれてさまよひ出づ

「螢よ汝は何處へ行く」御空に輝く神秘成の元へ

秋の夜は月光隈なく澄み渡り 小虫の奏樂や哀れ

尺八の妙なる調べに 合するは何人なりや。

冬の夜は月は梢に 風寒く道は凍れり

哀れあの笛の響は 何人の成の果なりや

美はしの白雪よ

尊き白衣の天女が

純白の花にと亂れつゝ

とくゆるやかに御空より

ひらひら舞ひし優しさよ

アラ！ 美はしの銀世界

化粧凝らせし冬姫が

白妙衣の裳を曳れて

其の粧の清らして

緑色なす松ヶ枝に

姫がまどひし白の袖

そよそよ吹き来る北風に

おう！ 美はしの白雪よ！

ねがひ

四乙 中山重雄

静けさよ

私をいつもつゝんでくれ

やはらかなフランクネルで赤坊をつゝむ様に

美しい夢をそつと抱きしめる様に

私のすべてをつゝんでくれ

そしたらこびりついてゐる私の頭は

せんまいをまかれた時計の様に

ちつとはチクタク動き出すだらう

私をいつもつゝんでくれ

静けさよ

四行詩

五乙 樋上露翠

椿

門邊のあしだに君きませしと

よむ本すてゝ出で行けば

赤い大きい椿の花が

ボトンと前へおちました。

千鳥

父さんいづこ母さんいかと

濱の千鳥にどうたなら

あの山越えてあの海こねて

遠いみくに泣いてゐた。

旅衣

山河こねて村里こねて

歩む力もなくなくに

莖つむ子に野の道とへば

蝶の行方と花でさす。

月見草

君います空あがねにそめて

紅や黄色の月見草

花手折りつゝ薬屋さんは

唄すさびつゝ西へ行く。

南の國

きた國にある友のたよりに

野雪景色しのべども

あつき日ざしに消えうせて
山羊よふ唄のきこゆなり。

落葉

おつる木の葉をながめつゝ

可愛いゝ小鳥がなきまする

その聲調がわかるなら

おまへの望みきいてやろ。

青い光

下宿のまどでシグナルの

青きまたゝく灯をながめ

すごい響の笛の音に

そつと涙をふきました。

夕顔

夕顔のさく棚の下

たゝすむ乙女こねほそく

歌へば垣のかなたにも

清き音色の一よぎり。

別れて

君とあひ見しうれしさは

別れし後に知りぬれど

君と別れし悲しさは
いつの世にかは語らまし。

旅

昨日は山路今日は野路
明日はいづくぞ白雲の
身はつかれけり日はくるゝ
行先とほき旅路かな。

(コスモス咲く頃)

彦中行軍歌

四甲 上野中

一、すみれ花咲く

越後の野邊に

今ぞ葉緑

さゝす鳴く

赤き心や

朝日に匂ふ

天下の雄は

彦中の健兒

二、琵琶の空に

青空冴わて

名譽の歴史

徽章も清し

學問に運動に

武術に鍛へ

いざ／＼歌はん

彦中の赤鬼

壽春夏之公孫樹

我が校庭の一隅に

鳥歌ひ百花笑む貽蕩の内に

霞を突き立て立つ公孫樹

汝はみにくき無骨な姿を

おゝ公孫樹よ自重せよ

汝は憂國の志士に等しきを

老鶯幽谷に歸りきゝ行なき

世はすつかり青みどり

赫々たる夏の直射に容謝なく

汝は木陰を作り涼の受撫を

なれのもとに育まる若人に

おゝ公孫樹よ汝は若人の戀人なり

去りし友

四乙 堀江喜一

愛書をふせてただ苦し

火影を後に出でくれば

こぼれ松葉に露置いて

岸邊の蘆草ひかるなり

かたへの蘆生盗み見て

似姿むねにうかべつつ

笑顔を眞砂に尋ねれど

我影のみはうごめきて

たぞと叫ばん人もなし

友とわかれてただ一人

ふみと別れてただ一人

月夜の湖にうそぶきて

下駄も流れよと足ひたす

病める身

四乙 堀江喜一

我が病める身の悲しさは

青いひとやに埋もれて

白いベッドのぬしとなり

白いをんなにまもらるて

青いといきは夢うつつ

午後の光りにてらされて

雪

二甲 山中信夫

眞綿のやうな

眞白い雪

ふわりふわりと

降つては積り

又消れて行く
真白い雪
お前は何處へ行くのかへ

夜

かゞやかしい薄暮と共に
光は死ぬ
やかましい道路の上に
影は消ゆる
暗黒が再び来る
大空には
無音に星はつめたく
下界を見る
夜の町に血に餓えた人は
さまよつて居る
赤々と冬の夜の町は動か無い
彼等の靈は沈黙して居る。
夕べ
すいすいと

青き小鳥
夕闇に失せて
さらさらと
小川ながれて
夕の哀愁ひた寄る
うつとりと
仰ぐ我が魂の
飛び行く果も知らず
ひそひそと
日は沈んで行く
美しい夕焼の中に

東宮殿下御渡歐歌

一丙 楠好雄

(一)八重路はるばる異國に
皇御國の御世嗣は
彌生の三日軍艦の
香取に召して御旅立
(二)海原遠く波靜か
艦は日の本後にして

靜かにつくや歐洲の

同盟國の英國に

(三)英佛伊國ベルギーと

文武風俗文明を

御英明なる殿下には

もれなく隅なく御見學

(四)又英國と御親交

東西二國の親交は

萬國平和のもとゐなり

世界平和のもとゐなり

(五)朝な夕なに神かけて

殿下の御無事を祈りしが

九月三日の本に

御無事奉還めでたけれ

日東帝國少年の歌

一丙 横山進一

世界の五大強國と

其の名も高き帝國は

朝日の昇天する如く

國威は四海に輝けり。
其の強國で兩親の
情の下に生ひ立ちし

熱血漲る少年は
毒蛇も斃す勇氣あり。

かくて榮ゆく大御代に
一朝事ある其の時に

日東帝國勇少年
正義の刀輝けば

四海の賊は忽に
なびき伏すべし渾身の

誠意の下に帝國の
國威は益々上るなり



雜 錄

第三十三回卒業証書授與式

大正十年三月十一日本校は第三十三回卒業証書授與の盛式を挙げ、前途有爲の青年一百一名を社會に送り出しぬ。午前十時式は君ヶ代の合唱に始まり次第形の如く莊嚴のうちに終る、式後卒業生一同を前室に招き茶話會を催せり。歡を盡して散會せしは正に十一時。

今左に當日の諸辭を掲げん。

式 釋

茲に本日をして第三十三回卒業証書授與式を舉行する當り多數諸賢の貴臨を忝うす不肖本職の深く欣幸とする所なり謹んで謝す

卒業生諸子に告ぐ諸子が多年螢雪の功空しからず芽出度卒業証書を受く父兄の喜び諸子の光榮何物か之に若かん余も亦衷心欣賀に堪へず加ふるに創立以來未だ曾て有らざる一百有一名の多きを算する卒業生を出せること洵に以て本校の一大盛事と

以て其業を幸ふ洵に慶賀に堪へざるなり惟ふに諸子の中には更に進みて高等の學府に入り益學理の蘊奥を極むるものある可し或は退いて家庭の人となり社會の實務に従事するものある可し其の嚮ふ所は一ならずと雖も學海は渺茫として際涯なく世路は崎嶇として蹉跎し易し諸子須らく思を茲に致し常に身體を鍛練し志操を堅實にして益智徳の修養を勵み堅忍持久克く其の志す所を大成し以て國運の發展に貢獻せんことを望む斯くの如きは獨り諸子が本日の榮譽をして一層光輝あらしむるのみならず亦以て本校教養の精神を發揚する所以なり諸子夫れ旃を勉めよ

大正十年三月十一日

滋賀縣知事正五位勳四等 堀田義次郎

祝辭と所感

本年三月彦根中學校の卒業式に際し茲に一片の祝辭を呈し併せて所感を述べんと欲す

抑も祝辭を呈せんと欲する事柄は昨年の夏季彦根中學校の生徒諸君が東京の隅田川に於て端艇競走の際優勝の地位を占め大に名譽を發揚せられたる

謂ふべし

然れども翻つて考ふれば諸子が今日の光榮は社會の一員として呱呱の聲を挙げたる誕生の祝に過ぎず又以て渺茫たる大洋に航せんと船の漸く纜を解けるにも喩ふべし諸子が眞の活動勞苦は今日より始まること謂ふべきなり深く戒めなるべからず尙現下世界の大勢と國際關係とを見るに帝國の前途多事ならんとす而るに近時社會の風潮漸く輕躁浮薄に流れ殊に思想界の動搖と經濟界の變調とは深く憂慮に堪へなるものあり諸子が將來に於て最も留意すべき所とす

望むらくは前途多望の諸子よ尙高等の學府に向ふとも直に社會の實務に就くとも日夜本校教養の趣旨を遵奉し勵精刻苦以て邦學の爲にに口爲の材たらんことを努め併せて本校の名譽を發揚せんことを一言以て告辭とす

大正十年三月十一日

滋賀縣立彦根中學校長安河内健次

告 辭

諸子多年學を本校に受け切磋功を重ね茲に本日を

事是なり其當時拙者は新聞の記事を読み獨り大に喜び思はず愉快を三唱せり此の端艇競走出場せられたる健兒は今回卒業せらるゝ五年生のみなるや或は四年生も参加せられたるや夫れは兎も角茲に祝辭を呈して滿腔の欣喜を披瀝する次第なり此の祝辭は何卒校長を始め教官各位並に生徒諸君に於て御受納あらんとを乞ふ何となれば端艇競走に於て優勝の地位を占め名譽を擧げ得たるは偏に生徒諸君の奮導訓練其の宜しきを得たるの結果にして上下一致協力に成功なればなり是に於て拙者は大に感ずる所あり少しく左に之を述へん

從來聞く所に據れば彦根中學校の成績は他の中學校に比し殘念ながら優等の位地にあらざるものゝ如し毎年の卒業者中より高等の學校に進入する者比較皆寡しと云ふ是れ生徒諸君の不勉強に基因するか又は校長以下教官各位の指導監督宜しきを得ざるに基因するか大に研究を遂げ考慮を要すべき問題ならん

拙者は彼の端艇競走に於て優勝を占められたる例

を引かん。即ち生徒諸君が常に練習に勉強努力し校長以下教官各位が指導訓練其の宜きを得上下一致協力せば數學の競走に於ても外國語の競走に於ても其他諸般の競走に於ても決して他の中學校に比し劣等の地位に立つことなく常に優勝者の地位を占め彼の端艇競走の時と同じく彦根中學校の名譽を發揚することを得へし願くは校長以下教官各位並に生徒諸君茲に活眼を開き上下一致協力して彦根中學校なる一大端艇を日本全國の學海に浮べ其の競走場裡に奮勵努力し勇往邁進し如何なる強敵にも之に打勝ち以て優勝旗を收めて凱歌を奏せられんことを不文を願みす赤心を吐露し彦根中學校の隆盛を祈り一片の祝辭と所感の一節を述ふる此の如し

大正十年三月十一日

彦根育英會幹事長 男爵 中村 覺

謝 辭

本日茲に彦根中學校第三十三回卒業證書授與式を舉行せらるゝに當り我等父兄たるの故を以て此盛典に列するを得たるは誠に欣幸とする所なり

等が志操堅實切磋琢磨の功を積み給ひし賜ならずんばあらず兄等の榮譽何物か之に如かん世界未曾有の大戦全く終熄して再び平和の域に入れりといへども、各國は經濟の戰に於て今や將に其の第一彈を送らむと晝夜其の準備に餘念なし、見給へ今次の大戦によりて列強の疲弊せし所如何に慘憺なりしかを。而して今や其の致命傷の恢復を圖る如何に熱心なるかを。此の秋此の際我が帝國民たる者豈に一大覺悟なくして可ならむや、況んや他日國民の中樞として國家の大事に任すべき兄等に於てをや。されば兄等の前途や當に多望にして其の責任や實に重大なりと謂ふべし。兄等今や學校を辭し、或は進んで高等の學府に學ぶとも或は、直ちに繁劇なる社會の競争裡に立つとも兄等の實力を發揮し、大いに國家に貢獻する所あらざるべからず。然れ共其の行路たるや必ずしも平々坦々たるにあらず或は萬丈の峻險前に聳む千仞の谿谷後に横はり、剩さへ浮華輕靡の妖魔は常に兄等を邪道に誘はんとするなるべし。

庶幾はくば兄等確固不拔の精神と不屈不撓の意氣

回顧すれば我等が子弟入學以來茲に五霜其の間校長算下並に諸先生の深甚なる恩情と熱烈なる薰陶を蒙り本日卒業證書を拜受するを得且懇篤なる訓諭を辱うす本人等の光榮は勿論父兄一同の喜悅何ぞ之に加かん
今や國運の發展に伴ひ人方必須の域に遭遇するの際進みて高等の學校に入るものと退いて實業に従事するものとを問はず各其所志に向つて奮勵努力以て他日の成功を期し多年の鴻恩に背違せざらんことを誓ふ終りに臨み諸先生の御健康を祈り併せて本校の隆昌を希ふ

大正十年三月十一日

第三十三回卒業生父兄總代 加藤 勘治

祝 辭

今や梅花馥郁、百鳥將に歌はむとするの時に當り本日茲に本校第三十三回卒業證書授與の盛典を舉げられ我が親愛なる五年生諸兄には多年刻苦勉學の功空しからず慶く卒業の光榮を擔ひて母校を去らしむとす。願ふに兄等の今日ある固より恩師諸賢の懇篤なる薫陶の致す所多しとは云へ又以て兄

を以て此の妖魔を攘ひ此の險難を冒し多年蓄積せられたる學識を基礎とし益々研鑽修養を怠らず上は國家の樞轄に當り下は本校の名譽を舉げ以て恩師諸賢の鴻恩に報いられん事を。生等不肖なりと雖も驚鈍を盡し拮据勉勵以て兄等の後を逐はむとす。而して諸兄假令袂を別ち海山遠く隔つとも永く生等を顧み尚誘掖指導の仁惠を垂れ給はれよ。聊か蕪辭を述べて祝辭とす。

大正拾年三月十一日

在校生總代第四學年丙組生徒 安食鳳麟

答 辭

茲に本日をして生等の爲に盛大なる卒業證書授與の式典を舉げられ知事閣下を始め諸賢の貴臨を辱うす生等の光榮何物かこれに若かん惟ふに生等の今日ある一に校長先生を始め恩師の懇篤なる御薫陶に依らずむばあらず今や世界の大勢は口に平和を唱ふるも内實競走の鎗を削りて止まざるなり我帝國の將來事益々繁からむとす此の時に當り國家社會の一員として呱呱の聲を舉ぐ生等の前途や實に多事責任や重且大なりといふべし生等淺學菲

才其の能く之を全ふせざらむ事を是恐る唯庶幾くは校長先生の告辞の旨を遵守し且つ諸先生が平素の御教訓を服膺し以て此の責任を盡し鴻恩の萬一に報いんとす尙在校生諸君に一言せん生等今日を以て慈母の懷を去る既往數年共に親しみ俱に學びしを思へば今更に感慨措く能はざるも離合集散の理奈何ともす可らず希くは諸君良く校規を恪守し奮勵努力益々我校の充實を圖れ聊か蕪辭陳べて答辞とす

大正十年三月十一日

滋賀縣立彦根中學校

第三十三回卒業生總代 三和 一夫

大正九年度褒賞錄

品行學業優良ニツキ賞狀及一等賞牌授與者

第四學年

不破 善次

品行學業優良ニツキ賞狀及三等賞牌授與者

第五學年

三和 一夫

在學中精勵につき賞狀及一等賞牌授與者

全

森本 佐一郎

全

野口 富藏

全

大橋 右一郎

第四學年

全

西澤 一衛

全

中江 亮一

第三學年

全

新井 泰榮

第二學年

全

正谷 新次郎

全

森藤 吉郎

全

正野 敏次郎

全

細田 宗次

全

角田 清八郎

全

大崎 彌太郎

全

秋山 英三

全

北村 禎太郎

全

増田 源太郎

全

前橋 貞治

全

北川 光藏

全

深田 武三郎

全

北川 省三

全

田中 武三郎

全

加納 均一

全

岩根 恒吉

全

水谷 久藏

全

北村 貞太郎

全

増田 源太郎

全

寺村 英三郎

全

岩崎 源藏

全

小梶 誠一郎

全

古池 邦三

全

中川 治郎

全

蓮井 益

全

中村 辰三

全

吉田 喜三郎

全

西村 三郎

全

中田 三郎

全

小島 芳三

全

前川 善藏

全

川添 桂藏

全

坂井 四郎

全

吉岡 光三

全

武田 昌夫

全

村岸 義雄

第二學年

正野 敏次郎

全

力石 武次郎

全

高崎 義太郎

全

一守 貞二郎

全

森 藤吉郎

全

野口 正藏

全

朝比奈 敏夫

全

吉居 政彦

第二學年甲組 副長 前橋貞治
級長 田中武三郎

全 乙組 副長 笠原和雄
級長 大橋正太郎

全 丙組 副長 羽根田廣造
級長 藤林泰藏

五月左の如く異動ありたり。

第五學年乙組 級長 坂東正明

九月同前

第五學年丙組 級長 新井泰榮

第一學年甲組 副長 高橋桂太郎
級長 石島達

全 乙組 副長 林英信
級長 大谷義雄

全 丙組 副長 宮村又七
級長 二橋五男

藤田邦一

校友會各部役員異動

學藝部 部長 浪打義也

雜誌部

理事 瀧本賢隆
部長 野口正藏
理事 大崎彌太郎
白田紀六
安食鳳麟
中江亮一
正村達次郎
新井泰榮
正谷新次郎
森藤吉郎
大橋武雄
角田清八郎
細田宗次
眞野數馬
森俊一郎
松木幹一
木下長保
茂森德次郎
宮川英二
小堀武夫

武術部

部長 理事

水上部

部長 理事

理事

秋山英三
川添桂藏
池田衛
三原寅三郎
堀口兵次
藤村助三郎
原田政藏
野寺勇
杉本義三郎
吉田喜三郎
藤井源三郎
東林清
岸田英太郎
山本郷三
川瀬規矩三
杉本武夫
竹原正之
村岸英太郎
關谷正雄
瀧口智

角力部

部長 理事

地平二郎
澤田實
西川義太郎
河村義雄
高橋富三郎
川村庄次
松永乙次郎
北村保
坂東正明
須藤德成
山本壽
上橋勇
木村辰藏
室谷榮松
杉本弘
富永保
橋本義雄
田中傳吉
夏川貞藏
深田義三

野球部

部長 理事

徒歩部

部長 理事

文庫

委員長

庭球部

部長

附 錄

第一學年甲組

石島 村上巳代治
鹽谷加壽雄
小林篤三郎
伊藤正胤
運動部 部長
追記 部長
雜誌部 部長
文庫係長
杉山茂一
山本勇
高橋桂太郎
西澤嘉一郎

▲寄贈紹介▼

我が校生徒運動獎勵の爲、昨年、大日方正隆氏は漕艇部の、八木靖次氏は陸上運動會の、何れも燦爛目を奪ふ優勝旗を寄贈せられたり。彦中健兒たるもの、宜しく兩氏の好意を謝し益體育の練磨に努め其の芳志に報ゆべきなり。茲に校友會は其の美舉を録し謹んで厚意を謝す。

滋賀縣犬上郡彦根町大字西場馬
全 愛知郡日枝村大字澤
全 犬上郡彦根町大字北組
全 伊香郡余呉村大字中ノ郷
全 阪田郡息郷村大字樋口
全 犬上郡彦根町大字川原
全 彦根町大字土橋
全 豊郷村大字八目
全 阪田郡息郷村大字樋口
全 神崎郡五峯村大字佐野
全 阪田郡長濱町大字神戸
全 長濱町大字大手
岐阜縣惠那郡中津川
滋賀縣犬上郡彦根町大字芹橋
全 蒲生郡北比都佐村大字小谷
全 犬上郡彦根町大字小鍛
全 愛知郡八木莊村大字南野口目
石島 遼
内藤 信夫
木村 謙次
田部 村浩
山口 精一郎
今村 保治
大西 渡
林 英信
廣田 幹一
大野 秀雄
村上 正和
鳥居 憲一
杉浦勝太郎
岸本幸二郎
吉村 俊雄
北川 壽三
森谷善一郎

全 犬上郡多賀村大字多賀
全 東甲良村大字横關
全 神崎郡能登川村大字北田
全 蒲生郡苗村大字山ノ上
全 愛知郡箱村大字薩摩
全 阪田郡長濱町大字伊部
全 入江村末原
全 神崎郡五峯村大字山路
全 蒲生郡金田村大字淺小井
全 犬上郡彦根町大字本町
全 阪田郡春照村大字村木
滋賀縣伊香郡片岡村大字柳ヶ瀬
滋賀縣犬上郡彦根町大字川原
全 彦根町大字本
全 彦根町大字中鍛上片原
全 千本村字正法寺
全 彦根町大字上魚屋
全 蒲生郡金田村大字西本郷
全 犬上郡久徳村大字中川原
全 彦根町字一番
小澤 享
奥川 鉄夷
中村 武司
西居 義雄
西澤 與作
竹中康次郎
田中 潔
柳田仙次郎
南 嘉 道
北村 吉藏
西村 憲精
森 雅 雄
高崎秀次郎
後藤彌一郎
中山 新次
北川 譽一郎
淺 野 清
安達憲三郎
野村 末藏
石原謙二郎

全 彦根町大字芹橋十二丁目
全 彦根町大字芹橋八丁目
全 彦根町大字芹橋十二丁目
全 彦根町大字三番
全 阪田郡春照村大字村木
全 長濱町高田
全 犬上郡彦根町大字本
全 阪田郡鳥井本村大字鳥居本
第一學年三組
滋賀縣犬上郡千本村大字東沼波
全 北青柳村字中鍛
全 愛知郡葉枝見村大字下稻葉
全 犬上郡彦根町大字上魚屋
全 愛知郡愛知川町大字市
全 東淺井郡大郷村字南濱
全 犬上郡多賀村字多賀
全 阪田郡息郷村字三吉
全 犬上郡彦根町大字四番
全 阪田郡六藏村大字田
全 阪田郡醒ヶ井村大字一色
野村 捨藏
池田 潤三
飯島 通義
岸田米次郎
田中 準一
上林 忠雄
姉川 建次
上田 周藏
岡崎 諦三
大谷 義雄
越 後 正
村田 藤一
青木與三郎
澤田 義三
大谷 伍平
木部 豊松
富永志賀三
西川駒太郎
岡野 貞治

滋賀縣阪田郡息郷村大字牛打

全 愛知郡葉枝見村大字服部

全 犬上郡彦根町字樋屋

全 犬上郡彦根町字四十九

全 阪田郡醒ヶ井村大字醒ヶ井

全 犬上郡青柳村大字甘呂

全 阪田郡長濱町字祝

全 犬上郡彦根町大字職人

全 犬上郡彦根町土橋

全 神崎郡五峰村大字山路

全 犬上郡高宮町

全 犬上郡豊郷村字石畑

全 蒲生郡安土村大字下豊浦

全 阪田郡柏原村大字梓河内

全 犬上郡彦根町字二番

全 犬上郡彦根町字安養寺中町

全 犬上郡彦根町連着

全 犬上郡彦根大字川原

全 阪田郡醒ヶ井村醒ヶ井

全 犬上郡彦根町大字本

澤 効 一

森野 源三

天方 敏郎

高木幸四郎

山 岸 巖

辻 善 七

宮村 又七

前川 宗男

廣田良太郎

櫛田 信藏

北川治太郎

村岸直治郎

橋本 政男

長谷部守二

日比 益藏

辻 孫四郎

田中孝太郎

田村外次郎

川崎 四郎

深尾 久三

滋賀縣 全 彦根町字勘定人

全 神崎郡能登川村能登川

全 犬上郡久徳村大字大岡

全 全 豊郷村大字安食

全 全 彦根町字西榮

全 全 多賀村大字多賀

全 全 久徳村大字日ノ木

全 神崎郡栗見村字西見新田

全 愛知郡稻枝村大字稻里

全 犬上郡彦根町本

全 愛知郡秦川村大字斧磨

全 犬上郡彦根町字餌差町

全 犬上郡彦根町字二番

第一學年丙組

滋賀縣犬上郡彦根町字中敷上片原

全 阪田郡長濱町字三ッ矢

全 犬上郡彦根町字四番

全 阪田郡長濱町大字祝

全 犬上郡久徳村大字久徳

全 彦根町二番

三田村光夫

川崎 一郎

井上 廣然

近藤 建藏

細野 善一

重森 考藏

小財 修三

居原田多平

岡崎 諒觀

田中 文平

西澤 省三

山田 千里

吉川 弘

森 藤 次

伊藤 賢藏

齊田幸次郎

中川 榮一

横山 進一

土屋 庄藏

滋賀縣 上郡南青柳村大字甘呂

全 彦根町大字金龜

全 阪田郡入江村梅原

全 犬上郡彦根町字三番

全 全 彦根町字馬場

全 全 豊郷村字安食

全 阪田郡鳥居本村長谷

全 犬上郡高宮町

全 神崎郡八幡村字小川

全 犬上郡彦根町字四番

全 全 彦根町字伊賀

全 全 多賀村大字多賀

全 全 大瀧村字佐目

全 阪田郡春照村大字杉澤

全 犬上郡龜山村大字

全 全 多賀村大字多賀

全 全 彦根町大字京

全 全 彦根町字四番

全 全 青波村大字後三條

全 全 千本村大字大堀

辻 勤

近藤 忠夫

玉田 博道

藤田 邦一

大鳥居季彦

淺岡作太郎

米 澤 巖

楠 好 雄

中堀 重一

寺脇太次郎

二橋 五男

重盛 重吉

那須 行英

要石 直樹

青山庄之進

川村稟久三

石田 宗一

田中小一郎

朝日奈 豪

小川 信藏

滋賀縣蒲生郡愛知川町中屋

全 神崎郡五峯村大字佐野

岐阜縣養老郡多良村西山

滋賀縣犬上郡彦根町字四番

全 阪田郡長濱町大手

全 犬上郡彦根町橋本

全 阪田郡息長村大字箕浦

全 犬上郡福滿村字西今

全 伊香郡鹽津村大字鹽津濱

全 犬上郡豊郷村大字野田山

全 阪田郡醒ヶ井村大字枝折

全 犬上郡彦根町字本

全 阪田郡入江村大字磯

全 阪田郡長濱町大字神前

全 犬上郡龜山村大字安食

全 阪田郡長濱町大字祝

全 犬上郡福滿村字尾

學校日誌摘要

大正十年四月

八日 午前八時始業式あり、伊藤教諭の就任式

を行ふ。午後一時より入學式。

十五日 第一時限に藤谷教諭の告別式、終つて同教諭を停車場に見送る。

二十日 遠山教諭の告別式あり、第一時限の不時呼集を行ひ、宇曾川堤へ野外遠足を行ふ。

二十五日 打江教諭の就任式を行ふ。

二十八日 午前中上野教諭告別式。並に中村教諭就任式あり。

二十九日 朝佐竹教諭の紹介式執行。

五月

一日 午前八時より本校創立紀念式を舉行し、式後大洞の入江に於て水上運動會を開催す。

三日 谷口教諭の告別式舉行。

七日 池田教諭の告別式並び高阪教諭の新任式を行ふ。

十日 五學年生の優勝旗受領祝勝大會あり。

十三日 午後一時より寺垣中將の海事思想に関する講話あり四時終了。

十四日 登山遠足を行ふ。

十七日 零時半招魂社參拜。

二十七日 朝海軍紀念日に關する講話あり、引續き學藝部大會を開催す。

六月

十日 飛行場見學の爲、生徒一同を引率、八日市に行く。

十六日 西澤教諭新任式を行ふ。

七月

十一日 第一二學年の水泳教授開始。

二十二日 水泳の終業式を行ふ。

二十六日 本校野球選手京津大會に於て東山中學と試合、十一對四にて大勝す。

八月

三日 大津に於て舉行せる國際漕艇俱樂部主催の端艇競漕大會に於て我が本端艇部選手優勝す。

九月

三日 東宮殿下御歸朝の祝賀式を舉行、式後多賀神社に參詣、學校長玉串を捧ぐ。

十四日 東宮殿下京都御出發御還啓遊ばさるゝに付午前七時五十二分彦根停車場にて奉送す。

十七日 杉山教諭の新任式あり。

十一月

十三日 午前八時行幸紀念舉行、式後武道大會を舉行。

十六日 午前三時半校庭に集合、大堀鞍掛山にて機動演習見學。

二十八日 朝禮後田中教諭告別式を行ふ。

十二月

二日 午前八時講堂に入り、皇太子殿下攝政御就任に關する詔書及令旨奉讀式を行ひ、學校長より訓話ありたり。

六日 午後第五學年生の父兄會を開く。

十日 朝禮の際高田教諭の新任式を行ふ。

十二日 第二時限の始に布崎教諭の告別式を舉行。

十五日 職員生徒一同午前九時二十二分彦根驛御通過の東宮殿下を奉送す。

大正十一年一月

九日 始業式終りて茂木教諭の紹介式あり。

二十四日 朝禮の際池田教諭の告別式ありたり

二十六日 午前八時小島教諭の紹介式執行。

十八日 八月三日國際聯盟俱樂部主催の端艇競漕大會に於て祝勝端艇競漕會を開催す。

二十一日 午後一時招魂社參拜。

二十七日 午後零時半陸軍歩兵少佐太田義三氏の講話を講堂に聽く。

二十八日 午後佐和山神社參拜。

十月

三日 午前九時より角力大會を開く。同日第五學年生四十九名は、森下、杉山、松永三教諭引率の下に、午後六時五十七分の彦根驛發の列車にて東京方面の旅行に出發す。

四日 第四學年生徒五十三名、浪打、中村、寺島三教諭の引率せられ、奈良大阪方面の修學旅行に午前七時四十二分彦根驛を出發す。

七日 第三學年は比叡山に、第二學年は三井寺方面に、第一學年は大溝に、夫々一日の修學旅行をなす。

二十一日 學藝部大會を開く

三十一日 午前八時より天長節祝賀式を舉行、同九時より陸上運動大會を開催す。

二月

四日 山内督學官御來校。十一時半まで授業を參觀せらる。

八日 午前八時故山縣公の功勞及び國葬に關する講話あり。

部 報

學 藝 部 理 事 瀧本 賢瞳
野口 正藏
大崎彌太郎

本學年度の學藝部は、我等三名理事を承り、部長浪打先生指揮の下に、銳意刷新以て從來の弊風を打破せんと努めた。随つて其の方法も、幾多の改革を斷行し、成るべく多くの辯士を他校並に其の他の辯論會に派遣して、辯士の熟練と部の發展を促した。其の第一回は、五月八日大津市交道館に於ける日出新聞主催辯論會に、瀧本賢瞳君を派遣した。

日出新聞大津支局主催 學生青年團辯論大會出演之記

派遣辯士 瀧本 賢瞳

此の日出新聞主催辯論大會に出演の爲、浪打先生に伴はれ、午前九時卅四分發にて大津へ出向した。開會は午後二時、辯士の大分は各大學生青年會員二名師範生一名であつた。各辯士は主として政治外交思想方面に。私は「四面楚歌」の題の下に日露戰爭當時の我が對外關係より、今日の四面楚歌的關係に説き及ぼし、須く國力の充實を以て四面楚歌中より脱出しなければならぬと結んだ。翌日出新聞は左の批評記事を掲げた。

「彦根中學の瀧本賢瞳君は「四面楚歌」とし、我が國の現狀は四面楚歌の中に在りと喝破し、外國の我が國に對する態度と、アンダロサクソンの發展を述べ、卓を叩きて危機の到來せるを絶叫せり」と

次に愈々我が部第一回の試みとして來る五月二十七日學藝大會は開かるゝ事となつた。聞け各辯士の意氣と抱負を。

學藝大會之記

五月二十七日海軍記念日を卜し、本年度第一回

であつた。

三、新聞賣子

一 甲 竹 中 康 次
星製藥會社の社長の幼年時代、七條ステーションで新聞賣子をしてゐた時の正直から、今日の成功に至つたことを、美しい態度と明瞭な聲を以て論じて行く所全くお手のもの。壹等賞の榮冠は遂に君に歸した。

四、油 斷

一 甲 石 島 達

冒頭から溢るゝ様な愛嬌で説き出す。字の由來から始つて吾人の覺悟に及んだ。上出來、二等賞を受く

五、海岸の望遠鏡

一 丙 森 藤 治

三四回頃の雄辯に酔うて幾分閑劣りの感があつた。

六、中江藤樹

二 丙 岩 泉 清

内容豊富であつたが、稍冗長であつた。

七、勇敢なる兵士(英語)三乙 増田源太郎

可成りの出來。

八、日米若し戰はゞ

五 甲 安 食 鳳 麟

内容見るべきものがあつたが、場内喧騒の爲充

の大會が開催された。學年が改まると共に、方法

にも多大の改革があつた。朝から始められたこと出演者獎勵の爲懸賞になつたことなどは、其の最も顯著なるものであらう。吾人は年と共に盛大に赴くを衷心より喜ぶと共に、愈々我部の發展せんことを切に希望するものである。

開會に先だち校長先生登壇され、日本海々戰當日敷島艦内の實話を述べ、尙國是を破壊して今日世間の缺陷を救済せんとすることは、到底不可能である約二十分間の訓話があつた。

一、開會の辭

部長 浪 打 先生

破るゝが如き拍手と共に登壇せられ、自分は東國の生れで辯論は至つて拙く、發音の如きも極めて不明にも拘はらず學藝部長に任せられたことは、實に皮肉の感があると前述し、辯士聽衆及び賞品授與の方法等について二三の注意をして降壇された。時に九時。

二、空論を避くべし。

二 甲 若 林 孝 三 郎

近時一般に空論に走る傾向あり、吾人は歸納法に依つて之を避けねばならぬとて降壇、上出來

分徹底しなかつたのは實に残念至極。

九、橘中佐 助け舟 一甲 北川 壽三

二、步調取れ 五乙 植田 與惣八

意氣に始つて意氣に終る。但し内容貧弱。

二、字違ひ 一乙 大谷 義雄

さながら落話を聞く様。二等賞を受く。

二、英語暗誦 二乙 羽根田 廣造

先づ無難。二等受賞。

三、米國は何故に禁酒國となりたるか

三甲 川 添 桂 藏

經濟學の講義を聞く様。二等受賞。

二、思ひ遣り 一丙 玉 田 博 道

我子なら供には連れし雪の夜。雪の日やあれも人の子樽拾ひ」等の句を引用して處世上思ひ遣りの必要なことを説く。少しく語調に注意してはしかつた。

一五、拜金を愛金

三丙 前 橋 貞 治

一六、忍の一字

四丙 藤 田 正 雄

口調が少し早過ぎた嫌があつたけれ共、元氣あり内容もあり、あの體軀からよくまああの聲が

流麗な一曲に滿堂恍惚として恰も夢の天國に遊ぶが如き感あらしめた。榮ある一等賞は君に授けられた。

二、世界的人 二甲 堀川 辰之助

聲明晰よく場内に徹底した。二等受賞

二、僧空海と我生の躍動五丙 新 井 泰 榮

清朗な聲を以て僧空海の「如實知自身」と云ふ語を引き、又佛蘭西大革命に、ルネッサンスに例を各方面から引いて、滔々懸河の辯もて我校の將來憂ふべきことを述べて降壇。正に今日の白眉、一等賞は君に授けられた。

三、謠曲「頼政」

古曲床しく拜聴した。

三、閉會の辭

部 長

散會正午

以上の如く辯士は可なり成績であつたが、時間の不足と聴衆の誠に騒しかつたのは、從來の我が校の弊風として眞に遺憾千萬であつた。

聽て一學期の試験が始まり、我が部の仕事も一段落を告げた處が思ひの外突然十六日、八日市ス

と一同驚かされた。忍によりて成功せし釋迦を例に引いて述べ降壇。二等賞を受く。

二、劍舞 一乙 岡 崎 諱 三

萬綠草中紅一点とも云ふべくあつたけれ共、一同が期待した程の出來ではなかつた。但し意氣愛すべきものがあつた。

二、英雄論 英語 五乙 中 山 重 雄

英語であつてあれだけ謹聴させたのは、全く君のお手柄であつた。益々自重せられんことを切望するものである。二等賞を受けられた。

二、愛 二丙 岩 崎 由 太 郎

内容幼稚であつたが、先づ可成りに出來た。二等賞。

二、修學旅行の思ひ出 一丙 米 澤 巖

三、道の爲に奮起せよ 三乙 野 瀬 光 三

美しい形容と透き通る様な聲とで、ユグノーの一生は述べられた熱もあり。内容もあり、正に大雄辯家の卵、益々練習されんことを祈る。二等受賞

三、獨唱「京都」 一甲 姉 川 建 次

、ム會より来る二十四日に催される辯論會に來いどの案内を受け、試験の疲もそこ、新井。野口兩氏の快諾により兩辯士を派遣する事に決定した。

八日市ス、ム會主催辯論大會出演記

隨 伴 者 瀧 本 理 事

本日部長病氣缺勤の爲瀧本理事部長代理として付添ひ十二時四十分發近江鐵道にて午後二時八日市着、直ちに會場なる八日市小學校へ到着した。聴衆凡そ二百名。幸ひ休憩時間中であつた。會再び續行せらるゝや、プログラムの順により野口辯士登壇され「現代の青年に告ぐ」の演題の下に、或は大平洋會議の處置、極東問題、學校昇格問題等を縱横無盡に論破し、現代青年に確固たる覺悟を促して降壇。次に早大の奥村君次に新井辯士の順序であつた。新井君の演説は「一學期辯論大會に月桂冠を得られた其れなれば更に云々する必要はない。只二百の聴衆は水を打つたる如く靜かであつた。是れに依つて如何に新井君の雄辯なりしかを語るに難くはあるまい。或者は富妻那の辯と

稱し、或人は未來の獅子兒と激賞した。其後小學校長及び中學校長等の講演があつて、午後六時に終つた。茲で一寸此のスム會なるものを御紹介申さう。此の會は我彥中卒業生其の他數名の志士を以て組織され。運動に學術に盛んなる發展を爲し。正に生氣瀦測の會である。

第二學期始業以來我が部は更に辯士の養成に努め、毎土曜日放課後希望者の練習を開始した。

九月二十日我が部は大津師範よりの招きにより縣下の同校主催の辯論會に辯士として中山重雄君を推舉した。

滋賀師範 縣下中等學校辯論會出演感想

出演辯士 中山 重 雄

生れ落つるや話の下手なものと、氣の小さいのことで、壇上の人となつて、所謂辯論なるものをやつた事のない私は、瀧本君から師範の大會へ出演をすゝめられて、少からず不安を感じたのでしたが厚かましくも引き承けました。題は「人としてのベートベン」としました。内容は或二冊の本から

すつかり取つて來たのです。私は人に對しても論に對しても、自分が其れを批判すると云ふ力は少しもありません。本を讀むのも殆んど無意識にやつて居ます。これは大變いけない事だと思つてゐます。いやお恥かしい次第です。兎に角これにはベートベンの苦みぬいた一生を述べました。話し振りは少しあはて過ぎました。もう少しゆつくりと親切な野次と云ふよりも、注意の聞けた時は、もう終りでした。今少し早くあの注意を云つて呉れ、ばよかつたと思ひました。或辯士が「社會の改造」と云ふ風の事を云つてゐたので、師範も隨分開けたと浪打先生が云つて居りましたが、後でそれは他校の生徒だと云ふ事が分りました。話は自分を一聽衆として考へればあまり六ヶ敷過ぎたのや、空疎なのや、自分に興味の無い事やらで、好きなのは一つもありませんでした。私達は凡ての方面にもつゝ、勉強すべしだと思ひました。續いて十月十七日には大垣中學校へ笠原安雄君を、第八高等學校主催近縣中等學校辯論會に新井泰榮君を夫々派遣した。

大垣中學校主 青年雄辯大會に出演しての感想
皇太子殿下行啓記念 辯 士 笠 原 康 雄

一、開會閉會の辭を生徒の幹事が述べたる事。

故に自活的な事を知つた。

一、イエースノーの叫び聲が高かつた。

故に熱心に聞いて居る事を証明してゐた

一、音樂の盛んな事に感心した。

女學校からピアノを借りて合唯をした。

グイアオリンの獨奏があつた。

第八高等學校辯論大會に派遣されて

辯 士 新 井 泰 榮

去る十七日第八高等學校に出演致しました際の所感を少し御報告申し上げます。會場は名古屋市會議事堂内でありまして、辯士の休憩所から講堂（？）は勿論受附まで、中々に完備されてゐるのに第一驚きました。講堂には長は紙に辯士の名と演題とを書いて張り出してゐることは普通の様でした。

正一時間開會と云ふ様に申越してありましたが、全く時間が正確に行はれるのには流石にと首肯さ

れました。各學校の派遣辯士や演題は、プログラムの通り行はれましたが、各辯士の論旨態度等には實に感心と云ふよりは外はありませんでした。尤も十人が十人までとは申されませうけれども、私は汽車の都合もありました爲、最後まで聞いて居られませんでしたから、全体に就いては申し得ませんけれども、私の聞いた範圍では、現下帝國の狀態をのべて、吾人青年の奮發を促す様の雄辯が大多數でありました。又愛とか信仰とかに關してのものも二三聞きました。要するに私達に取つて大體青年の思想がどうのかうのと云ふ様なことは分りませんが、辯論そのものに關しては、私等の學校より各學校は遙かに進歩してゐると思はされました。

尙八高に於きまして、本年から教授の方とかが御出になつて、論旨、態度に就いて審査をされ一等から五等まで等級をつけることのでありました。

聴衆は主として中學校の生徒でありまして、一般の人々も大分見られました。尤も好きな人はかり

の集りであるからでありませうけれ共、辯士が登壇すれば、一度破るが如き拍子をする外には、決して野次つたり私語したりする様な人とは一人も見出されませんでした、であるからして、演壇に立つものに取つては眞に幸であります。けれ共何と無く居眠りでもしてゐるのではないかと、却つて物足らぬ感じを與へないでもありませんでした。其の後八高辯論部より新井君へ宛て三等賞を贈つて來た。

次には十月二十一日我が部の第二回學藝大會は午前十時より開會された。

第二回學藝大會の記

一、開會の辭

部 長

午前十時二十分部長先づ壇上に立たれて開會を宜せられた。次に本年度に於ける學藝部より各學校其の他の辯論會へ派遣せし辯士並に其の際の情況等に關して御報告があつた。滋賀縣師範に於けるそれ。大垣中學に於けるそれ……本校に於けるそれとの差を述べ以て聽衆の反省を促された。「本校の成績の舉りし時、初めて我が辯論部が燦然と輝くのである。即ち辯論の輝く時は我が校

の成績が舉つたのである。故に諸君は猛省せざるべからず」

と結んで壇を下られた。時に十時四十分。

二、不具者の協力

簡潔 沈着 只だ惜むらくは低音

三、人間は月世界へ

一丙 松 宮 誠 一

四尺の小身もて如何にも落ちつき拂つて演じ出した。壇上の身振態度頗る自然、聽衆をして誠に恍惚に思を起さしめた。材料精選せられ初年級生徒として極めてふさはしき演題であつた。

四、歐米人の氣風

二丙 林 總 吉

五、維新當時の青年

二丙 苦 板 展 次 郎

「人間はどんなに長生をしても漸く七十才までしか生きられない」と語り出し、「維新當時の青年より多くの偉人が傑出したのは、皆各自の努力に依つて得たのである」と喝破し「今の青年の俸給に汲々として居るが如きに比ぶれば、實に天地の差である。實に我が維新は青年に依つて作られたのである。書生書生と輕蔑するな今の大臣元は書生」。實に青年らしき維新の青年を背景に痛快極まり

なし。今少し熱をもつて貰ひたかつた。

六、ハーモニカ獨奏

三丙 富 田 忠 之

うまい、流石はローズ俱樂部のキャプテン

七、乃木大將

一乙 富 永 志 賀 三

乃木將軍の少年時代、御両親に依つて訓蒙されるより説きおこし、身體の練磨は實に我れ等の時にありと説きおこし、身體の練磨は實に我れ等の時にあると結びで、我等の奮起を促した。劍柔道及び体操の時間に見學ばかりして居る諸君はさぞ耳が痛かつたらう。

八、團結

一甲 西 村 憲 雄

桃太郎の日本一のさび團子より、一致團結の効力を説き一に自己の充實を圖り、一意専心公に奉ずるの美風に及ぶ。之を以つて吾人は國家の爲大に團結の必要を認む」と

九、大器晩成

二甲 笠 原 和 雄

人事は何れも僥倖を以て成功す者に非ず、只不屈なる忍耐卓越せる努力とを以て之を得る。假令之を以て成功すとも、この貧弱なファウレデーシヨンの上に立つ切業偉績は、早晚その弱点を曝

露す。今の青年僅少の努力を以て成功せんとす。

此れ一大事業を遂行せんとする者の誤れる第一歩なり。要するに「今時の青年は須く現實に生きて徒らに彼岸の光明を望む事なく。堅忍不拔終生の事業に没頭すべし」と

二、ハーモニカ合奏

西村駿一郎外二名

二、夜の少年

一丙 二 橋 五 男

氏の熱誠溢るゝ真情を流露せる雄辯は、流石所謂野次主義の聽衆をして只鑿々の恩あらしめぬ。二等賞。

三、田園讚美

四甲 上 野 中

常こ我が校の愛嬌家として知られて居る君が、壇上に立つや先づ聽衆を喜ばした。その説く所田園讚美、都會の成り金輩は大金を投じて摸倣的な庭園を作るが、田舎に於ては其の必要がない。即ち居乍らにして風光明媚なる山水に接する事を得」と誠に流暢な口振りであつたが、今少し眞面目な態度を要する。

午 後 の 部

三、ハーモニカ合奏「美しき川」

寄宿舌ローズ俱樂部

よく出来ました。

一、後嗣醒天皇

一乙 梅田 信 彦

立て板に水の如き口調を以て、畏くも一天萬乗の陛下が天が下には隠れがもなしの御境遇より、竟に建武の中興に至り、漸く御宸襟を安ませられしも束の間、芳山の落日に深く北方の天を望ませ給ひて右手に御劔を左手に法華經を………もはや是れ以上書く事も云ふ事も出来ぬ。余り悲しいから満場すゝり泣く聲が聞えた。月桂冠は君の手に

二、獨唱「荒城の月」

一乙 岡崎 諦 観

極く卑近な例を引いて簡単に結んだ
一丙 近藤 忠 夫
初年級として無理もないが、余程アップした様だ。併しその勇氣には感心致しました。今後更に

二、想ひ中になれば色外に現はる

一乙 岡崎 諦 観

一丙 近藤 忠 夫

二、獨唱「荒城の月」

一乙 越 後 正

實に美しい聲の持主だ。すゞるに秋のあはれを催さしめ、思はず心の沈黙を覺わしめた。殘月正に西山に没せんとし、天地只千草に宿りし蟲の音を聞くのみ。

三、修養を論ず

五乙 右 京 健 二

云はぬは云ふにまさる。

二、獨唱「荒城の月」

一乙 越 後 正

大なる期待を以て向へられたる君、最初演壇に立つや溢るゝ様な愛嬌をふりまきつゝ、説き出す所は懸河の辯。將に飛ばんとするや先づ方向を定めよ。一度方向を定めた上は殺佛殺祖殺活自在。自由を要す。これぞ平素の兄の演説に比すれば聯か言語の洗練を缺きたりし感あり。而し顧みれば應援團長たる君は十六十七の野珠の仕合に。亦今回の學藝會に殆んど寧日に遑まあらざりし有様兄の爲に深く同情す。願くは將來の益々御發展を

二五、ハーモニカ合奏「港」

吉村俊雄外四名

二六、閉會の辭

部 長

道の爲に。

一丙 林 英 信

身を一農夫より起して僅々十數年間に六十余州を一手に握りし彼れ豊公。希氏の英傑も遂には死したり。嗚呼人生夢の如きか。

一、帝國の使命と亞細亞モンロー主義

三丙 大崎 彌 太郎

亞細亞に於ける白國人種の發展を防止し、大に亞細亞モンロー主義を敷延せざるべからず。と論ぜられた。論旨よく整頓し、音聲亦よく徹底した。二等賞。

二〇、獨唱 When you and I Were young

五乙 中 山 重 雄

満場寂として聲なく、春風に胡蝶の舞ふの想ひあらしめた。二等賞

三、乃木大將を慕ひて

五甲 北川 久 太郎

最も耳なれた材料を取り來つて、而も動もすれば野次り勝なる聴衆をして、かくまでに謹聴せしめたのは乃木大將の一種言ふべからざる尊嚴と。其れに加ふるに君の腹のどんぞこより湧き出る熱があるからだ。

プログラムは以上の如く進行し、丁度二時半に終つた。これで本年度の學藝會否辯論會は終つたのである。顧みれば我等三名徒らに重任を負うて賢明なる部長の御主旨をも満足する能はず。亦我が部の發展にも何等貢獻する所なかりしは深く校友諸君に謝する所である。

端 艇 部

京都帝國大學水上大會參加之記

第一選手舵手

大正拾年度の我端艇部遠征は五月二十二日京都帝國大學水上大會に依り第一回の幕は切つて落されぬ。

これより先彦中七名の勇士は、伊吹風膚寒き新學期の始より一葉の扁舟に乘じ、朝は蘆荻の下に眠る水禽を驚かし、夕は東山の月を吐く迄、風雨を冒し、荒れ狂ふ琵琶湖上に怒濤と戦ふ。

當日午前九時三十分始めて征途に上る戦士は、躍る胸を抑へながら熱誠なる校友會應援團諸君の聲援を感謝しつゝ、彦根驛を西へ會場石山に向ひ

ぬ。
京都帝國大學の端艇大會に出漕するは前例なきにはあらねど、其の瀬田川に催さるゝに當つての最初の参加にして、殊に何のコースに經驗少なかりしかば、部長以下選手種々作戦計畫に餘念なき内に、早くも汽車は戰場瀬田川を渡り石山驛に着きぬ。河に添ひて會場石山寺の下なる公園に至る頃より朝來垂れ罩めし暗雲散じ、比叡水面に吹き付けれど、河水波にたゞず、煌々たる太陽雲間より光を投げ絶好のレース日和なり。敵はと見れば膳所中學なり。よし昨年の怨晴してくれんものと、復讐の炎を若き胸に燃し、併せて本年の血祭に擧げてくれんと七名堅く決心志時に到るを待つ午後二時半決死の氣宇を眉間に漲らし、既に曳船に引かるゝ身となりて敵艇と共に瀬田川を下るコースは千百米の丁度洗堰の稍上流より石山寺下公園に至る間の逆航なり。金龜城下に膽を鍛へし健兒は、既に敵を呑むの概あり。さりながら古き歴史と六百の健兒のオールと思へば何ぞ一本一漕とて逡巡すべき。

しと雖も少なからず競漕艇の變れると逆航たるに困しみたり。即ち大學の艇は舷非常に低く、これに反してオール重く細く、加ふる逆航なれば、余程巧にオールを用ひざればスブラッシュ又は腹切を出すなり。

午後五時石山驛發戰場を望みつゝ東彦根驛に着せば、又々應援團諸君の歡呼を浴び、天にも昇る心地して解散す。終りに臨み先輩諸君及應援團諸君の種々御面倒を見られしを謝す (日記)

因に本日出漕選手左の如し

- C 堀口 兵次
- L 藤村助三郎
- 5 宮尾源二郎
- 4 川添助二郎
- 3 坂東正明
- 2 千種久夫
- B 原田政藏

横濱商業端艇部を迎ふ

關東に於ける斯界の雄嘗ては一高主催の端艇競

艇で戰機熟せり、號砲一發丘上の綠間より響く「そら漕げ」と二艇は弦を離れし矢の如く上流へ上流へと逆りぬ

白彦根中學 三コース 一着 六分一秒
赤膳所中學 二コース 二着 不詳

我コースは流れ急にして利非ずと雖も、日頃鍛へし腕はスタートへピー十本敵艇に先んずる事一身。されど敵もさるもの一時琵琶湖に覇を唱へし猛者なり。よく、我に従ふ「ミッドルへビー」叱咤の聲と共に元氣なる漕手は「よしやらう」と遽に急調を以て漕ぎだした。何ぞたまるべき一本敵と、我との距離遠ざかり行く。

兩岸の堤には觀衆踞り、無數の敵の應援者赤旗を振つて聲援す。而して誰の爲にか、我是に力を得て悠々とラスト見事に彼を數艇身の後に決勝線に入る。

白旗翠間に揚り我勝つ。

勝戦！ 勝戦！ 初陣に出漕し天晴れ敵首を揚ぐるとは本年の運だめし先づ幸ちよし。

(戦ひの後思ふに、我等幸いにして勝の榮冠を得

漕大會に優勝しける横濱商業學校端艇部より、同校此度の關西旅行の途次本校選手と御手合の希望する旨の通知ありたり、日頃相手淋しく腕鳴る折柄とて何ぞ辭すべき、たゞちに快諾し其の日の至るを千秋の思ひ待つ。

五月三十一日(火曜日)突如として快漢、横商の選手は姿を表し、本日放課後當港長曾根波止場附近にてレースを行ふ事となりぬ。コースは朝から池田部長其他先輩により確實に選定され、諸般の準備なる。且つ横商選手に本校の艇を自由練習の爲貸し與へコースの長さ等も彼に任す。午後三時愈々抽籤の結果、コース順、艇定まる。本日は此の前後になき快晴無風湖と漣だに起らず。

御互に一通りの練習を了へ、スタート北川尻に並ぶ。敵の選手をど見ればいづれも偉大なる体格を有し、皆二十貫に垂とぶする強者揃なり、しかも其の練習振りを見るも、これ亦見事なる漕法をなし、流石は横商なりと思はせたり。而して之に對する我は先日膳中を一蹴し名を異郷に残し名譽ある本校端艇部に更に一威彩を放つものと豫期さ

るゝものなり。而も金龜城の膝下に於つて珍らし
くも對校レースを校友諸君、彦根人士の前にて行
はんとするなり。此の一戦や實に我等にとつては
重大なるレースなり。彼に大なる力ありとも、我
には堅き心あり。肉と心、いづれが仆るが、隻方
充分の自信を以て號砲今やおそしと待つ、銃聲一
發相並びし二艇は白波を起て、スタートを切りぬ

横濱商業 赤 (伊吹)

ニコース 二着

彦根中學 白 (比良)

一コース 一着

最初彼約一艇身を先んじ、スターより急調を以
て我を壓迫す。然れ其平常の練習にて自信あれば
悠々として敵艇を追ふ。敵更に半艇身余を抜く、
我尙二十四五の緩調を以て進む。二百、三百米と
進むに従ひ、彼我の距離接近し來り、四百米頃彼
コースを誤り、我がコースに侵入し來る。いかで
之に躊躇すべき。突くべきは今ぞの聲と共に一
舉敵の右舷にタツチす。此時既に勝敗定まりたれ
共、吾は勝敗眼中に非ず而して敵のコツクス無法
にも手にて我がトツプを押反す。噫々しかれども
吾是の些細事に怒聲を發して争ふを潔しとせず武

堺ヶ濱出漕之記

昨年寸差を以てあはれ同州の敵に斃れし怨は、
其の戦士は一人だに現在残り居られ共、先輩の
辛き經驗の眠の前に見し我等七名は、無念やる方
なく、膚寒き頃より復讐の念は湖上に或はバック
臺に、汗と血とに變じ戰機に至るを待てり。一激
飛來「來る六月五日瀬戸内海堺ヶ濱にて」と！
こゝに愈我部選手は神戸新聞社主催第十回關西聯
合短艇競漕大會に出漕する事となれり。

六月四日午後零時半、晝迄の授業を終ふるや、
たゞちに彦根驛に參集、熱誠なる應援團諸君の萬
歳に送られ、捲土重來昨年の遺恨を雲ぐ可きは今
ぞ生きては再び歸らじと萬里遠征の途に就きたり
京大阪もいつしか過ぎ流車が三の宮驛に着くや、
有難くも多數先輩諸兄の御迎へを受け引續き神戸
市近郊海濱に至り、明日の用艇神戸高商のボート
を借受け練習す。海に經驗なき我等は、種々なる
点に不自由な感じたれども、大責任を思ひては苦
心練習漸く慣れて自信生ず。再び神戸の宿に案内
され實業團として參加の爲同行せし本校卒業生諸

士らしきレースを欲すれば敵艇の背後を廻り、徐
々に彼を壓し、ミッドルヘビーに最大力を以て彼
を抜く事一艇身、續いて一本／＼と完全に抜きさ
る。彼もさるもの再び我に肉薄す、然れど彦中魂
にいかでか當るべき一糸亂さぬ我がラストに彼遂
に疲弊し、三艇身の後へに敵をのこし我見事に決
勝線に突入し横商を破る。

終つて八商、横商、及び本校卒業生實業團と
の壯快なレースあつて紀念すべき横濱商業端
部のレースを了へぬ。

因に本日は絶好の日和にて白砂の汀に群衆黒く
集ひ盛會なりき。閉會後出漕者全部集ひ茶話懇親
會を開く。横商の監督の先生は我等の或るものが
曾て學びし恩師青木先生にて其の關係上横商の諸
君もなつかしく、つさせぬ話を惜みつゝ午後八時
諸君を彦根驛に送る。

終に本校應援團諸君の激烈なる應援を深く感謝す

出漕者左の如し

舵手 整調 五番 四番 三番 二番 一番
堀口 藤村 宮尾 川添 坂東 林 原田

兄と戰を前に安眠を貪る。

明くれば五日決勝の日は來る。早朝より電車に
て會場堺濱に押寄す。此日朝來の淡曇り細雨冷や
かに至るありて天候如何と氣遣はれしも、競漕開
始時刻より空次第に晴れ行き、白日燦として輝き
遙に淡路島を眺め得。

長汀には觀衆、應援團刻々に増加し、白旗、赤
旗、鐘の音、大鼓の響、その昔源平の戰をしのは
しむ。

戰機熟せり。時機到れり。いざ戰はん哉。

第一回戰(第九回) (八百米)

白 神戸商業 一コース 二着
赤 彦根中學 三コース 一着

敵は昨年二回、戰に於て互に鎗を削り遂々屈服
せしめし神商なり。本年再び雌雄を決せんとす豈
壯ならずや。

彼不惧戴天の仇を報せんものと殊死して我に
當る。我も亦必勝を期して遠來せしもの、血祭を
掲げてくれんと、共にランチに曳かれスタートに
着きぬ、號砲一發、ソラ漕げの聲と共に白沫を蹴